

## 質問の解答例

各章にある問題の解答例を示します。

S1章 構造の基本 (76)

S2章 複主体・複主語 (85)

S3章 態 (88)

この解答例の作成にあたっては八王子の文法研究会に集う  
次の方々の協力を得ました。(敬称略・五十音順)

大石有香 (特定非営利活動法人IFE)

木村泰介 (コンピュータ関連企業勤務)

申貞恩 (筑波大学・大学院生)

関口美緒 (筑波大学・非常勤講師・学術博士)

陶天龍 (東京外国语大学・学生・漢字教育士)

## S1章 構造の基本

## 解答例

**答S1-1** 「彼と」の「と」は、名詞「彼」が動詞「会う」の「相手」であるという論理関係を表し、「3時に」の「に」は、名詞「3時」が動詞「会う」の生起時刻であるという論理関係を表しています。

**答S1-2** 名詞「私」は、動詞「行きます」に対して「動作主」(主体)という論理関係を持っているので、格はあります。

**答S1-3** 辞書の見出し語としての名詞には動詞(や形容詞)との論理関係がないので、見出し語としての名詞「海」には格はありません。

**答S1-4** 名詞「机」が文の中に入らないのは、動詞「行く」とふつうどのような論理関係も持たないからです。

**答S1-5** ①「田中さんの1いますね。」の場合、「田中さん」は第1主格にあるので「田中さん」について述べます。②「田中さんが1いますね。」の場合、「田中さん」が第2主格にあれば、「田中さんがいる」という事実について、第3主格にあれば、「誰かがいるということは分かっていたが、それが田中さんであった」ということについて述べます。話すことばにおいて②の「が」が省略されると①と同じに聞こえます。

**答S1-6** ①「私の1歌います。」(第1主格)は、「私」について言いますので、意志を表したりします。②「私が歌います。」は、第2主格のとき、「私が歌う」事実について、第3主格のとき、「誰が歌うの?」という質問に答えて言います。発話で、②の「が」が省略されると①と同じに聞こえます。

**答S1-7** 「彼、いますね。」では「彼」はゼロ主語で、「彼」について言っています。「彼はいますね。」も「彼」について言っていますが、「彼」はハ主語になっていて、「は」のために「彼」が取り立てられた主題とされている印象になります。他の人と対比されている印象になることもあります。

**答S1-8** 「彼はいますね。」では「彼」はハ主語であり、彼について「主題」「対比」で述べられます。「彼がいますね。」では「彼」はガ主語で「彼がいる」事実、あるいは「いるのは彼である」ということが述べられます。

**答S1-9** 主語になるのは主格にある名詞です。「映画は見ます。」の「映画」は主格ではなく、「を格」にあります。したがって、主語ではありません。「映画を」の「を」が消えているのは、「は」が付加されたためです。

**答S1-10** 「私、学生です。」は、「私」を主格の格に置いたもので、これだけで文として成立しています。この文の「私」を主題化・対比化するために「は」を付けたものが「私は学生です。」です。したがって、「私、学生です。」は「私は学生です。」の「は」を省略したものではありません。

**答S1-11** 「兄は居間にいる。」の「は」による対比は、s③なら主語の対比で、動詞は同じ(か類似の)動詞であるので、たとえば「父は庭にいる。」という文との対比になっています。s⑦なら事象の対比なので、たとえば「(しかし) 雨はすっかりやんでいる。」「(しかし) 外はお散歩日和だ。」などの文との対比になっています。

**答S1-12** 「の」は文の中にある2つの名詞をつなぎますので、「由紀さん」と「絵」の2つの名詞がどんな文の中にあるかを考える必要があります。

- Ⓐ「由紀さんが絵を描いた。」なら「由紀さんがの絵」です。
- Ⓑ「画家が由紀さんを絵に描いた。」なら「由紀さんをの絵」です。
- Ⓒ「私は由紀さんから絵をもらった。」なら「由紀さんからの絵」です。
- Ⓓ「これは由紀さんにあげる絵だ。」なら「由紀さんにの絵」です。

「由紀さん」はⒶ「が格」、Ⓑ「を格」、Ⓒ「から格」、Ⓓ「に格」を持っています。「の」が付くと、「は」と同じく、格詞は消えることが多いです。

**答S1-13** 「の」そのものには意味はないので、「海の指」の元の文を考えます。たとえば、「右の人差し指で海を指し、左の人差し指で山を指す。」が元の文であれば、「海の指」は「右の人差し指」のことでしょう。また、「親指に『海』と書いてある。」が元の文であれば、「海の指」は「『海』と書いてある親指」のことです。

**答S1-14** たとえば、「パーティーをする広間にある壁にかかっている絵を描いた画家が持つ名」といえます。動詞等が不要で、「の」は便利です。

**答S1-15** 「だ -d=a-Ø」は「である -de=ar-u」の省略形です。  
「です -de=s-u」は「あります -de=ar-i=mas-u」の省略形です。

答S1-16

「です -de=s-u」は「であります -de=ar-i=mas-u」の省略形なので、「です」の「す」は丁寧の助動詞「ます mas-u」の一部です。「だ」は「である -de=ar-u」の省略形なので、丁寧の要素がありません。つまり、「です」は中に丁寧な要素が入っているので、「だ」より丁寧なのです。

答S1-17

「学生だろう	学生-d=ar- <u>oo</u> 」は,
「学生だ	学生-d=a-∅」
「学生である	学生-de=ar- <u>u</u> 」と同じ構造です(図S1-46)が、描写詞(下線部)が異なります。
「学生でしょう	学生-de=s-yoo」は
「学生です	学生-de=s-u」
「学生であります	学生-de=ar-i=mas-u」と同じ構造です(図S1-47)が、描写詞(下線部)が異なります。

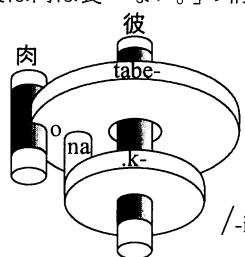
-oo, -yoo は「意志・推量描写詞」で、まとめて -(y)oo と書きます。

答S1-18

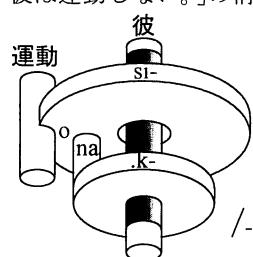
彼=中国 ではないので、これはうなぎ文です。  
元の文「彼はいま中国にいます。」が、必要な情報だけに省略されて「彼はいま中国」となり、これに文の体裁にするための「です」がつけられて「彼はいま中国／です。」といううなぎ文になりました。

答S1-19

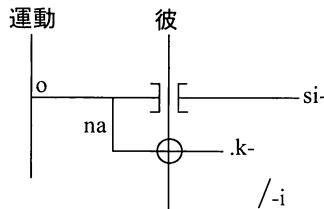
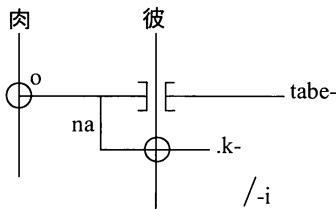
「彼は肉は食べない。」の構造



「彼は運動しない。」の構造



答S1-20



記号○は「は」を表します(S1.4 参照)。

答S1-21

動詞は、語幹 xxx-に直接否定詞-(a)na.k-をつけて否定形を作ります。

yom-ana.k-      tabe-na.k-

形容詞は、語幹 xxx.k-に他属性連続描写詞(連用形)の -u をつけてから否定形容詞 na.k-を続けて否定を表します。

haya.k-u na.k-      samu.k-u na.k-

形容詞は、語幹 xxx.k-内の xxx が形容実体なので、これを取り立てるためには「は」や「も」をつけることができます。

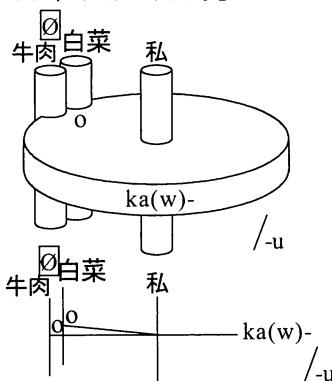
haya.k-u-wa na.k-      samu.k-u-mo na.k-

答S1-22

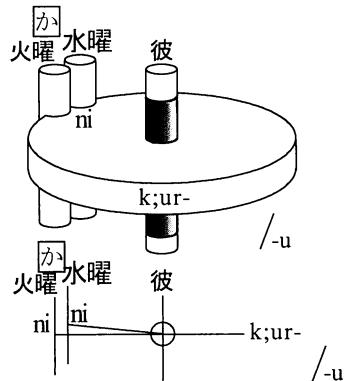
動詞「ある ar-u」の否定形は「あらない ar-ana.k-i」です。しかし、反対語として「ない na.k-i」という形容詞があります。否定形も反対語も意味はまったく同じで、「非存在」を表しています。意味が同じなので、長い「あらない」よりは短い「ない」を使うようになりました。つまり、反対語を否定形のつもりで使うようになったわけです。

答S1-23

「牛肉、白菜を買う。」の構造



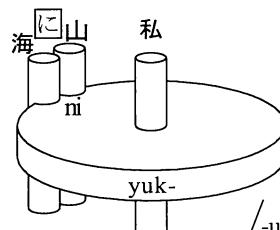
「彼は火曜か水曜に来る。」の構造



答S1-24

答S1-25

ふつうは「に」は列挙詞として認識され、「と／や」などで言い換えられます。  
(「海へ、山へ、行く。」のようなつもりの「海に」は格詞として認識されます。)



## 答S1-26

「地震が来る」の「来る」は「自然現象が起こる」の意味で、「彼が来る」の「来る」は「人が来訪する」の意味で、このときは論理関係が異なるので、列挙詞「と」で結べばおかしな文になります。ですから、「地震と彼が来た」はおかしな文です。

しかし、「来る」を「災いが来訪する」という意味で捉えるとき、「地震」も「彼」も災いと感じられていれば論理関係は同じになりますので、列挙詞「と」で結んで「地震と彼が来た」としても正常な文になります。

## 答S1-27

## 形容詞の拡大活用表の例

付加形態素の機能	付加形態素表 (語幹 tika.k-)	拡大活用表(例) (二次的付加形式を含む)	語例 (形態の名称は省略)	
構 造 の 形 を 変 え な い	(1)文を終止する  (2)主文を続ける  (3)他属性や実体 と関連づける	k① -i  k④ -u  k⑤ -ereba  k⑥ -u  k⑦ -i  k⑧ -u	-i  -u  -ereba  -u=t-e- <u>Ø</u> i -u=n-a. <u>k</u> i -u=ar-i=mas-en -u=ar-oo -u=ar-i=t-Øi=ar- <u>u</u> -u=ar-i=t-Øi=ar-ab <u>a</u> -u=goza <u>Ø</u> i=mas-u  -i -i=Ø包-t <u>Ø</u> -i=Ø包-n <u>Ø</u> =ar-a(ba)  -u=Ø包	近い。  近く,  近ければ,  近くて 近くない 近くありません 近からう 近かつた 近かつたら 近かつたり 近うござります  近い[ところ] 近いと 近いなら(ば)  近く[にある]

## 答S1-28

「である -de=ar-」の否定形は「であらない -de=ar-ana.k-」ですが、これは反対語「でない -de=na.k-」と意味がまったく同じなので、短い反対語を否定形として使うようになりました。このためです。

「でない -de=na.k-」は否定形容詞 (na.k-) を「で格」で使用しているものなので、断定基「である」の否定形とはいえません。(断定基の否定形としては「で(あら)ない -de=ar-ana.k-」と考えることになります。こう考えると二重否定「健康でなくはない」が(条件つきですが)肯定の「健康である」に戻ることが説明できるようになります。)

## 答S1-29 断定基「である」の使用例

- k⑥ -de=ar-i 他属性連続描写の使用例 他属性を続ける  
   ・彼の1はまじめ-de=ar-i=sugi-ru.
- k⑦ -de=ar-u / -n[u]=ar[u] 実体修飾第1描写例 一般的実体を修飾  
   ・健康-de=ar-u 子ども ／ 静か-n[u]=ar[u] 町
- k⑧ -de=ar-i 実体修飾第2描写例 実体「相 soo, 様 yoo」を修飾  
   ・彼にとってこれの1は重荷-de=ar-i=soo-de=ar-u.

## 答S1-30 「彼は動いた。」を4つの種類で考えることには微妙なところがありますが、次のように表現できるのではないかでしょうか。

- ・行為(有意有制)…… 「彼は(2m動こうと思って)動いた。」
- ・有意無制………… 「彼は(前に出たかったが自然に右に)動いた。」
- ・無意有制………… 「彼は(押されて前の人と触れずに)動いた。」
- ・事態(無意無制)…… 「彼は(強く押されて自然に)動いた。」

## 答S1-31 「分かる wak-ar-／聞こえる kik-oe-／見える mi-e-」の場合、wak-, kik-, mi- の主体に意志がある場合とない場合がありますが、制御はできないので、「有意無制」と「事態(無意無制)」の2つになります。

- ・有意無制      一生懸命考えて、やっと分かった。  
                     耳を澄ませたら、ついに聞こえた。  
                     双眼鏡で見たら、見えた。
- ・事態(無意無制) 山を見ていたら、突然その詩の意味が分かった。  
                     隣の部屋から男女の笑う声が聞こえた。  
                     トンネルを抜けて車窓から海が見えた。

## 答S1-32 「飲める」はひらがな分析では「飲め／る」となりますが、なぜ可能の意味を持つのか説明できません。ローマ字分析では「nom-e-ru」となり、許容態詞 -e- が可能の意味をもたらしていると説明できます。

## 答S1-33 「見る」は国語文法ではこの表のように活用するものと捉えています。語幹がないという不合理な分析です。

動詞	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	仮定形	命令形
見る	(なし)	み	み	みる	みる	みれ	みろ

語幹は mi-ru, mi-na.k-, mi-Ø=mas- のように mi- のはずです。

S解答例

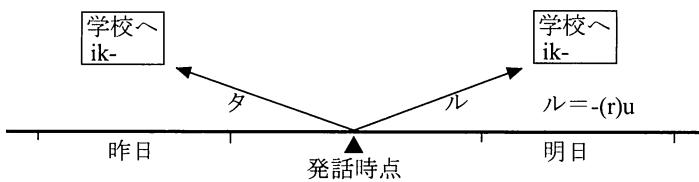
答S1-34

「私は明日学校へ行く／昨日学校へ行った」

過去

現在

未来



答S1-35

「私は今会社にいる／今本を読んでいる」

現在

現在

会社に  
i-

本を  
yom-

ル

テイル

発話時点

発話時点

状態動詞は「ル」で、動作動詞は「テイル」で現在を表します。

答S1-36

「私は今会社にいる／明日会社にいる」

現在

現在

未来

会社に  
i-

会社に  
i-

ル

ル

発話時点

発話時点

明日

答S1-37

未来の「着ている」が表すのは「未来・進行中」だけではありません。

[未来・進行中] 明日の朝9時ごろに美容室で着物を着ている。

[未来・結果状態] 明日の午後は着物を着ている。

[未来・記憶継続] 明後日はもう着物を着ているからドレスにする。

答S1-38

現在の「着ている」が表すのは「現在・進行中」だけではありません。

[現在・進行中] いま美容室で着物を着ている。

[現在・結果状態] いま着物を着ているからテニスはできません。

[現在・記憶継続] 前回着物を着ているから今日はドレスにしました。

## S解答例

答S1-39 次の時相は補助的な動詞なしには表現できないと考えられます。

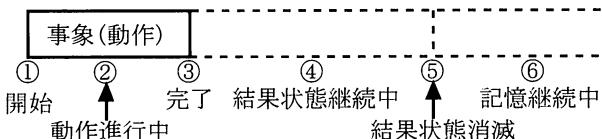
[未来・完了] 明日の10時に着物を着た。→ 着おわる

[未来・結果状態消滅] 明日6時に着物を着ていた。→ 着ていおわる

[過去・開始] 昨日9時に着物を着る。→ 着はじめた

[過去・結果状態消滅] 昨日6時に着物を着ていた。→ 着ていおわった

答S1-40



開始①から完了③までの時間の最小の事象……「死ぬ」(瞬間的)

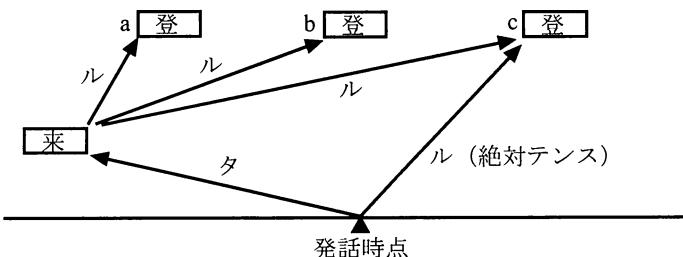
最大……「造物主が存在する」(開始も完了も認知できないほど長い)

日常の言語使用では数秒から数日、数年、数世紀の長さがあります。

答S1-41

「富士山に登るグループが来た。」の時間関係

過去 現在 未来



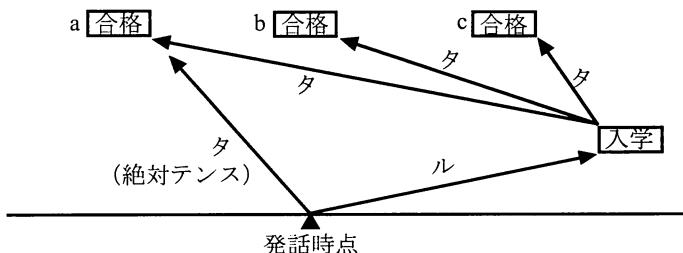
a ではそのグループは来たあと富士山に登山しました。

b では現在登山中です。c ではまだ登山していません。

答S1-42

「合格した受験生が入学する。」の時間関係

過去 現在 未来



答S1-43

「昨日買った本を読んでいる。」「明日食べるお弁当はここにある。」

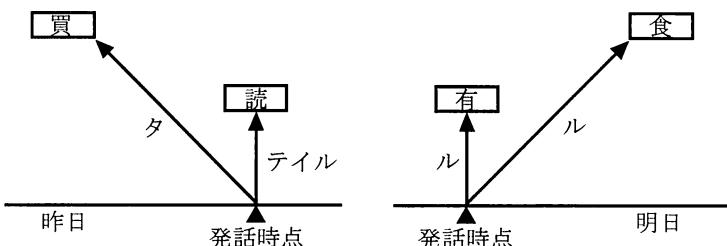
過去

現在

現在

未来

答S1-44



「昨日・明日」という語により、発話時点が基準点であることになりますので、動詞「買った・食べる」は絶対テンスをとっていると考えられます。

答S1-45

(もし)9時に出たら(未来 50), 間に合いますよ。

9時に出たら(現在 100)(9時に出たので), 間に合いますよ。(もし)9時に出たら(過去 0), 間に合ったのに。9時に出たら(過去 100), 間に合ってほっとしました。

答S1-46

「昨日行ったら」の部分が次の3つの場合で考えられます。

(もし)昨日行ったら(過去 0), 彼に会えた(のに)。

……実際は行きませんでした。

(もし彼が)昨日行ったら(過去 50), 彼に会えた(はずだ)。

……行ったかどうかわかりません。

昨日行ったら(過去 100), 彼に会えた。(よかったです)

……実際に行きました。

答S1-47

「雨が降ったら, 中止する。」の場合「雨が降ったら」は未来 50 で, 降るかどうかわかりません。「雨が降ったら, 涼しくなった。」の場合「雨が降ったら」は過去 100 で, 実際に降りました。

## S2章 漢字・複合語

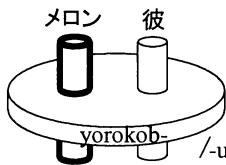
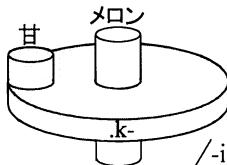
## 解答例

## 答S2-1

いずれも複合語の文で、本属複合語の文です。いずれにおいても本主体である「彼」が、それぞれ単位構造「髪が伸びた」(動詞属性)、「口が重い」(形容詞属性)、「歌が上手だ」(断定基属性)を属性としています。単位構造の中の「髪／口／歌」が本主体と明瞭な関係を持つ属性主体になっています。

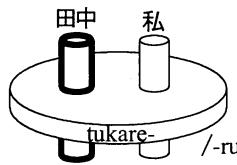
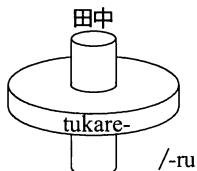
## 答S2-2

「メロンは甘い」は単位構造の文で、「メロンは喜ぶ」は因果の複合語の文です。(後者は「彼はメロンを喜ぶ」の構造からも導かれます。)



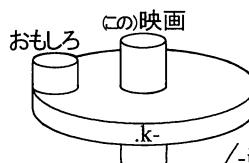
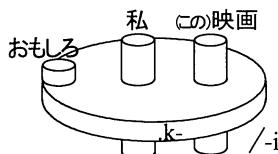
## 答S2-3

「田中さんは疲れる。」の文は、疲れるその人が田中さんである場合(単位構造)と、話者である場合(因果の複合語)の2つの場合を表すので二義性の文となっています。



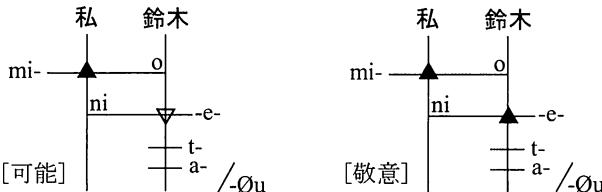
## 答S2-4

「私はこの映画がおもしろい」は感覚複合語文で、「私が「おもしろい」という感覚をもつ感覚主体、「映画」が「おもしろい」という感覚を帯びている感覚主体です。一方、「この映画はおもしろい」は単位構造の文です。このように、形容詞「おもしろい」が複合語文と単主語文で使用されているところに違いがあります。



## 答S2-5

「鈴木さんが見えた。」という文は通常の可能の意味のほかに「鈴木さんがいらっしゃった」の意味であります。その場合は、「見えた」が通常の可能(▽)と異なっていて、許容態主体である「鈴木さん」に意志と制御がある(▲)ものと考えられます。



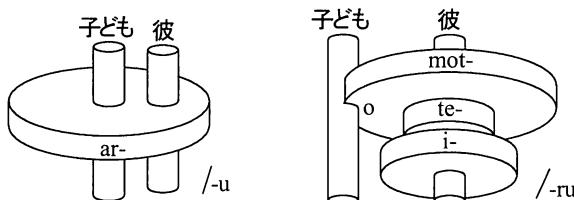
## 答S2-6

「英語が読める。」の文で「英語」が主語であるのは、構造で「英語」が許容主体になっているからです。



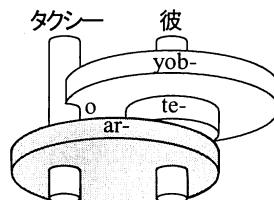
## 答S2-7

「彼は子どももある。」の文は、時場複主体の構造を持ち、「彼」は「場の主体」であり、「子ども」は「ある」の主体なので両者ともに主格を取ることができます。一方、「彼は子どもを持っている。」の文では、構造上で「子ども」は「を格」のみにあるので主格を取ることはできません。



## 答S2-8

「彼はタクシーを呼んである」の「ある」と「彼にはタクシーが呼んである」の「ある」が共通していて、かつ状態性なので、「彼」が「場の主体」になることができ、「テアル複主体」になるので「タクシー」は「が」格を取ることができるようになります。



答S2-9

「りんごを5個買う」と言えて「バスで3台行く」と言えないのは、下表のような「前提」と「規則」があるからだと考えられます。

「りんごを5個買う」は表の③に当たります。次も言えます。

- ① りんご5個買う
- ② りんご5個を買う
- ⑤ 5個りんご買う
- ⑥ 5個りんごを買う

言えないのは、④りんごを5個を買う、⑦5個をりんご買う、⑧5個をりんごを買う、です。

一般格である「で格」の場合、「バスで3台行く」は⑬に当たるので使用できません。使用できるのは⑫「バス3台で行く」のみです。

「支店へ3店行く」は⑯ですが可能です。「3店」は「行く」に対して「へ格」にあることが自明なので、規則のiiが適用されるからです。「3店支店へ行く」も⑭ですが、数量実詞「3店」の「へ格」が明確なので、規則 i, iiにより可能です。

数量実詞使用表

主格・を格				と格（一般格）							
①	学生	Ø	Ø	○	前a	⑪	Ø	Ø	Ø	×	前a
		Ø	3人	が	来た	○	i	⑫	学生	Ø	○ i
		が		Ø		○	iii	⑬	と	Ø	×
		が		が		×	前b	⑭	と	と	×
⑤		Ø	Ø	○	前a	⑮	Ø	Ø	Ø	×	前a
⑥	3人	Ø	学生	が	来た	○	i	⑯	3人	Ø	×
⑦		が		Ø		×	i	⑰	学生	と	ii
⑧		が		が		×	前b	⑱	と	Ø	×
										と	前b

(太線で囲んであるのは可能な組合せです。)

前提a :「主・を格」では格詞がなくてもよい。(格は自明なので。)

他の格では格詞を1つ使用する。(ただし、名詞と動詞の関係で、格が自明の場合は省略可。)

前提b :同一格詞の重複使用は不可。(念押しの気持ちの重複を除く。)

規則 i :格詞は後ろのものにつける。

規則 ii :ただし、数量実詞の格が不明確になつてはいけない。

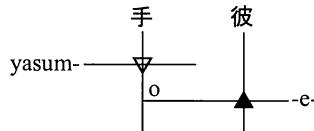
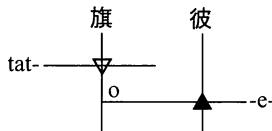
規則 iii :後ろの数量実詞の格が不明確にならなければ、前の名詞につけてもよい。

## S3章 態

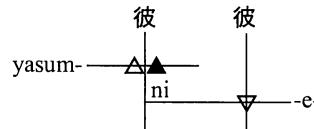
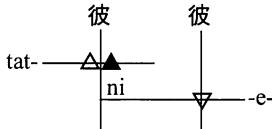
## 解答例

## 答S3-1

他動の場合は「旗を立てる」のような「対他許容」です。



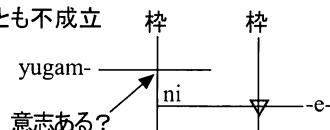
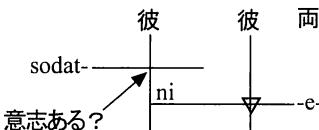
可能「彼は立てる」の場合は対自許容で、行為主体に意志があります。



他動のほかに可能があるのは許容態に対他・対自があるためです。

## 答S3-2

許容態-e-が可能を表せるのは、対自で、動詞の表す事態に意志があると感じられる場合です。「育てる sodat-e-/歪める yugam-e-」が可能になりにくいのは、「育つ／歪む」が意志によらずに生起するからです。



## 答S3-3

「並ばせる narab-as-e-」は原因基-as-e-なので、動詞「並ぶ」に関する能力・可能性・意志を持つ実体が対象となります。「並べる narab-e-」は許容態-e-なので、それら能力等の有無に関係なく対象となります。

「並ばせる narab-as-e-」

児童を並ばせる／馬を並ばせる

被写体を並ばせる／石を並ばせる

「並べる narab-e-」

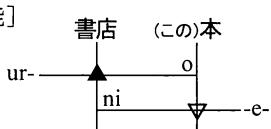
児童を並べる／馬を並べる

被写体を並べる／石を並べる

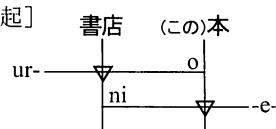
## 答S3-4

「売れる ur-e-」が可能を表すのは「売る」に意志をみる場合であり、自然生起を表すのは「売る」が事態であると感じられる場合です。

[可能]

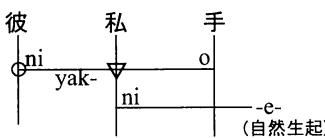


[自然生起]



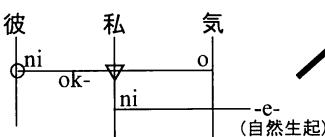
答S3-5

「彼(に)は手が焼ける」の構造



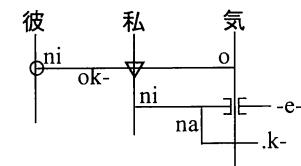
「手／気」が主語

「彼(に)は気が置ける」の構造



「自然に気をつかう」の意味

「気が置けない」の構造

「(自然に気をつかう)と  
いうことがない」の意味

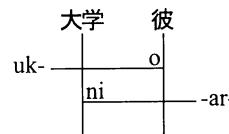
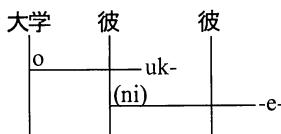
答S3-6

「話せる」という構造は2つあり、左図の対他許容のときは「彼に英語が話せる」となり、右図の対自許容のときは「彼が英語を話せる」となります。左図が二重主語と感じられると「彼が英語が話せる」となります。



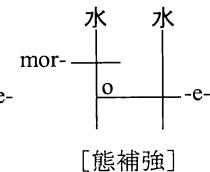
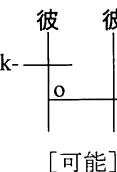
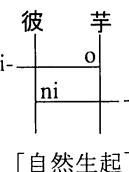
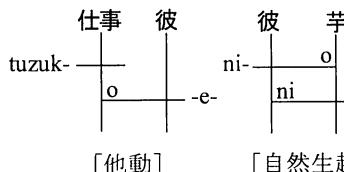
答S3-7

「大学を受ける uk-e-」は左図の構造で、このときの uk- は「人の行うこと(試験)に応じる」の意味で、uk-e- は態補強となっています。「大学にかかる uk-ar-」は右図の構造で、このときの uk- は「認めて受け入れる」の意味になっています。つまり、uk- の意味は異なっています。



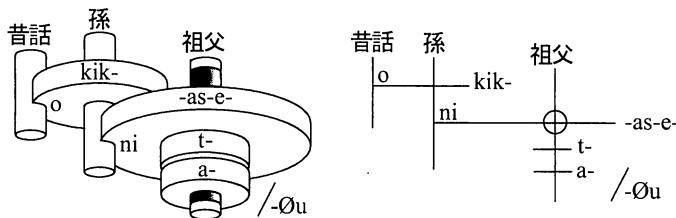
答S3-8

それぞれの -e- について [ ] の中に示します。



答S3-9

「祖父は孫に昔話を聞かせた。」の構造

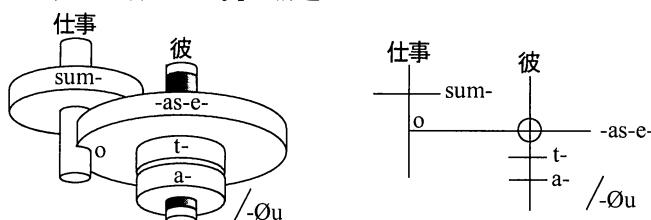


答S3-10

本文法では「使役」をt⑥に見るように「指示して」実行させることを考えます。「人形」には指示することはできませんので、「お人形を座らせた」は「使役の文」とはいえません。これは「直接他動」の文です。

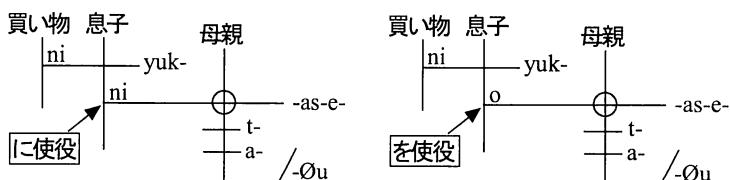
答S3-11

「彼は仕事を済ませた。」の構造



答S3-12

「に使役」と「を使役」の違いです。



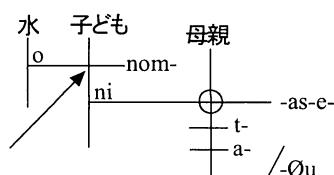
「に使役」では「息子」の意志に働きかける印象の強い表現になり、「を使役」では行為そのものの実現を重視する表現になります。

答S3-13

「母親は子どもに水を飲ませた。」

t⑤aでは母親は直接飲ませる行為をし,  
t⑥aでは母親は飲むよう指示します。

t⑤a 母親が直接力で実現  
t⑥a 母親の指示で実現



答S3-14

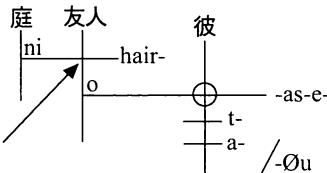
「彼は友人を庭に入らせた。」

t(5)hでは彼は背中を押したりします。

t(6)bでは彼は入るよう指示します。

+⑤h 彼が直接力で害現

#### t(6)b 彼の指示で実現

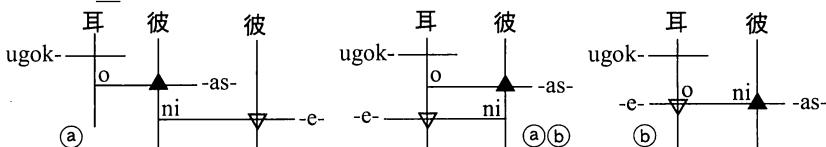


答S3-15

「車を走らせた hasir-as-e-」では原因者(主語)が運転するので、 -as-e- は「直接他動」を意味します。「彼を走らせた hasir-as-e-」では原因者は指示をするだけなので、 -as-e- は「指示他動」を意味します。

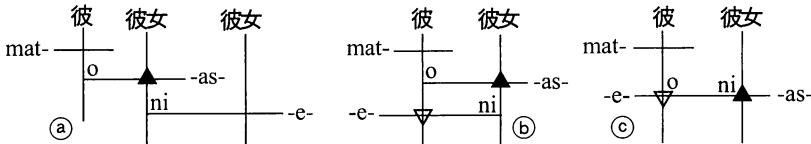
答S3-16

④「彼〇<sub>1</sub>は耳を動かせる」は対自可能です。⑤「彼(に)は耳が動かせる」は対他可能です。対他可能で属性が一体化すると、二重主体「彼〇<sub>1</sub>は「が動かせる」になります。事態は同じです。



答S3-17

②-e-が対自許容の「彼を待たせる」の場合、普通は-e-が有意有制で「結果招来」と感じられますが、そのつもりになれば-e-を「可能」と感じることもできます（「1時間ぐらいは待たせる」）。⑥-e-が対他許容であれば「彼女(には)彼が待たせる」のように可能を感じやすくなりますが、⑦複主体にもなるので、二義文も生じます（「彼女は彼が待たせる」）。



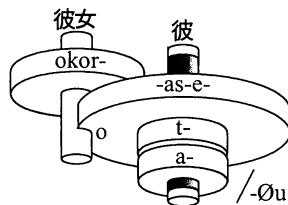
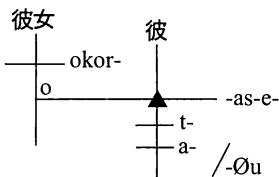
答S3-18

たとえば次の笑わせ方があります。このほかにも考えられます。

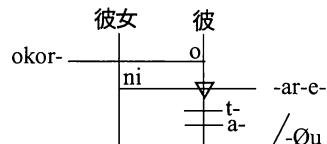
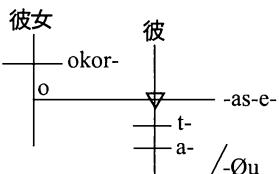
- |                                  |                      |
|----------------------------------|----------------------|
| ① 冗談を言って <u>笑わせた</u> (意図的結果招来)   | waraw(▽)-as(▲)-e(▲)- |
| ② やっと <u>笑わせた</u> (可能)           | waraw(▽)-as(▲)-e(▽)- |
| ③ 「笑って」と言って <u>笑わせた</u> (指示他動)   | waraw(▲)-as(▲)-e(▲)- |
| ④ 呂律が回らずに <u>笑わせた</u> (結果招来)     | waraw(▽)-as(▽)-e(▽)- |
| ⑤ 「思う存分笑って」と言って <u>笑わせた</u> (許可) | waraw(▽)-as(▲)-e(▲)- |
| ⑥ 笑いたいだけ <u>笑わせた</u> (放置)        | waraw(▽)-as(▲)-e(▲)- |

答S3-19 「彼は彼女を怒らせた。okor-as-e-」

t⑦aでは彼は意図的です。



t⑦bでは彼は無意識に怒らせています。受影で表現できる場合もあります。



[受影態] 彼は彼女に怒られた

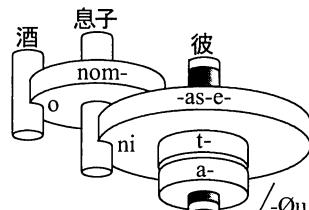
答S3-20 「彼は息子に酒を飲ませた nom-as-e-」

t⑤ 彼は息子の口まで猪口を持って  
いきます。

t⑥ 彼は息子に「飲み」と言います。

t⑦ 彼は息子の前に黙って徳利と猪口  
を置きます。

t⑧ 彼は息子に「飲んでいいよ」と言うか、飲むままにしておきます。



答S3-21 「④飲ませ(た)／⑤飲まさせ(た)／⑥飲ませさせ(た)」

④は「私」が「幼児がミルクを飲む」原因者で、⑥は「先生」が④の事態の原因者であることを意味します。⑤は④⑥と同意の可能性があります。



「④飲ませ(た)」



「⑤飲まさせ(た)」



「⑥飲ませさせ(た)」



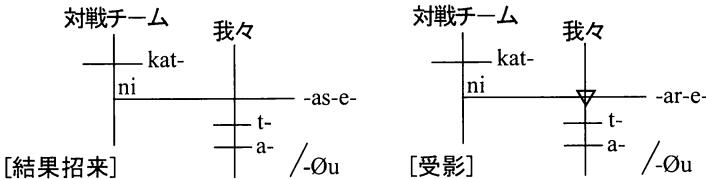
「⑥飲ませさせ(た)」

## S 解答例

答S3-22

「我々は相手チームに勝たせたが…… kat-as-e-」

この「勝たせた」はt⑦の「結果招来」と考えられます。t⑦「意図的結果招来」であれば「わざと負けてやった」、t⑦「非意図的結果招来」であれば「我々が弱かった」ことになります。後者は受影でも表現できます。

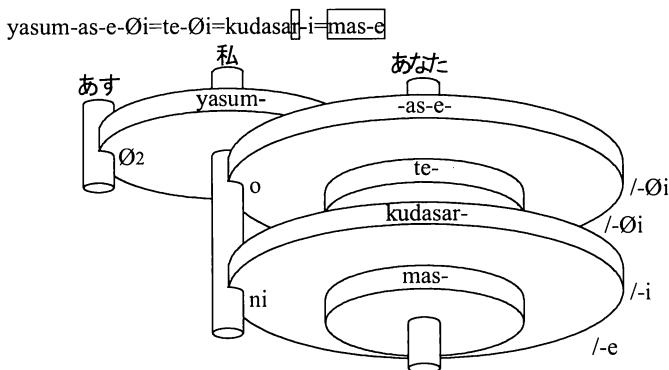


答S3-23

「寒気が滝を凍らせた」という表現は自然現象「滝が凍った」の攝理的原因者が「寒気」であるという、発話者の認識状況を示しています。

答S3-24

「あす、休ませてください。」という文は「あす、私が休むことを許してください。」という意味です。「ください」は「くださいませ」の「ませ」が省略されたものです。構造は次のようにになります。



(yasu.m- を yasum- として、kud.as;ar- を kudasar- として扱います。)

答S3-25

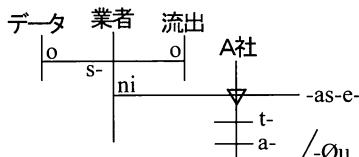
発話者は「業者がデータを流出した」という事態の原因者が「A社」であると認識しています。

原因者としてのあり方は

t⑦b「非意図的結果招来」か

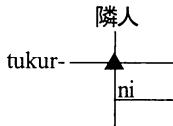
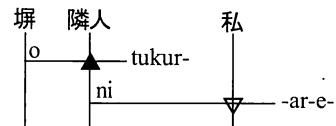
t⑧c「非意図的放置」での原因者です。受影でも表現できます。

A社は外注業者に顧客データを流出させ／流出された。



## 答S3-26

「堀が作られた」は直接受影で、「堀をつくられた」は間接受影です。直接受影は動詞の表す事態を構成する客体(堀)が受影するので事實を伝える意図がありますが、間接受影は動詞の表す事態を構成しない実体(私)を、迷惑な気持ちを受ける者としてわざわざ持ち込むので迷惑感が強く表現されます。このためです。

[直接受影] 堀が作られた(た)[間接受影] 堀をつくられた(た)

## 答S3-27

「結論が急がれる／待たれる」という表現はt⑩の「自発」に当たり、「私たちが結論を急ぐ／待つ」という感覚表現的な事態を「結論」の方を主語にすることで、自然のなりゆきであるという印象にします。

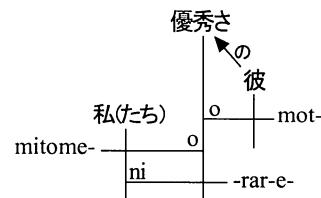
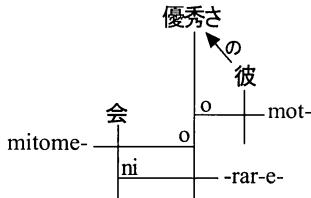


## 答S3-28

「彼の優秀さが認められる」の3つの場合の特徴を考えます。

[受影] 「会が彼の優秀さを認める」という事態を「優秀さ」を主語にして客観的事態として表現すると「受影」になります。

「会により)彼の優秀さが認められる。」



[自発] 「私(たち)が彼の優秀さを認める」という事態を感覚表現的事態とみて、「優秀さ」の方を主語にして表現すると「自発」となります。

「(彼の業績を見れば) 彼の優秀さが認められる。」

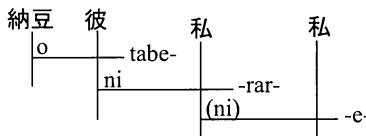
[可能] 主体を「会」や「私(たち)」のように「認める」意図・意志を持てるものとみなして、「優秀さ」を主語にすると「可能」が表現されます。

「(彼の業績を知っている)私には彼の優秀さが認められる。」

答S3-29

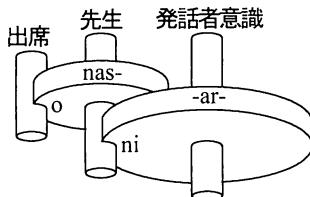
「彼に納豆を食べられる」の構造は図のとおりで、t⑨c の間接受影となっています。このため迷惑な気持ちが表現されます。

「可能」の場合なら「を格客体」が受影します(t⑪)。ここではそうなっていません。



答S3-30

たとえば「なさる nas-ar-」のように尊敬動詞は受影態 -ar- を含んでいます。この受影主体は「発話者意識」です。発話者意識は決して描写されず、意識もされないので、「なさる」があたかも1動詞のように感じられます。それで、動詞主体を主語として描写することができます。

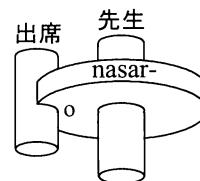


先生(ni)は出席(を)なさる  
「ござる」は歴史的に

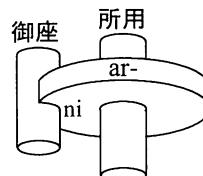
ござにある goza-ni=ar-

ござ ある goza-[ ]=ar-

ござ る goza-ni=ar-



先生の1は出席(を)なさる



所用の1ござる

と変化してきた動詞で、ar- は存在を表す動詞「ある」であり、受影態の -ar- ではありません。これが「ござる gozor-」が尊敬動詞に入らない理由です。